

心を殺さない学校がほしい

毎月講読している雑誌の中に広木克行先生が不登校について書いている記事を見つけました。その中からいくつか抜粋して紹介します。

『心を殺さない学校がほしい』不登校の子どもたちから聞いたぐっと心にささる言葉です。先生からの評価のためにいい子を演じ友だちから浮かないように調子を合わせる。学校が自分のままではいられず緊張が続く場所になっている。学校へ行きたくても行けないという心を表した言葉だと思います。「友だちの中にいるのが怖い教室で暴力やいじめが増えていること、競争教育の中で子どもたちが分断され、心許せる友がいないうつ状態を示しているようです。そして「先生の大声が怖い」教師が管理のために大きな声で指示を出す。子どもたちからすると、自分が怒られているわけでもなくて怖くて教室に心の居場所がない状況を物語る言葉です。もう終わりにしたい学校に行けない自分が弱いからだ、親に心配かける自分が悪いと責めているのかもしれない。自分は消えてしまいたいと思っているのかもしれないと語っていますが私も同感です。そして続けて「不登校は命の問題だと捉える必要があります。子どもが不登校になった時、ほとんどの親や教師はその原因を考えます。原因が分かれば解決策も見えてくるのでは」と思い過去の出来事について子どもに問い詰める場合が多いです。同時に将来の不安をかき立てて、子どもを学校へ戻そうとします。子どもも早期に学校に戻すことが個別的な解決だと思い違いしているケースがあまりにも多い。苦しんでいる現在の心を無視して登校を迫ることは、心の傷を更に深める教育虐待です。親に知ってほしいことは原因を問わず寄り添うことの重要性です。苦しんでいる子どもの言葉とその姿の意味に関心をもち続けること、それが心の傷の癒やしにつながるからです。と書いています。そして続けて「親が一方的に抱いてきた期待を捨てて、現在のありのままの子どもを受け入れる。その変化を私はアキラメの境地と呼んでいます。そこに至るまで、子育てを間違えたのではないが、子どもが弱いのではないかと親は苦しみます。その苦悩を抱いて相談に来られる親たちに出会う中で「この親がいてくれれば大丈夫」と感じるようになりました。」・・・親が子どもに「そのまま大丈夫」と伝えることができたとき、親の変化を感じた子どもは、わが家が居場所で心を癒やすことができるのです。「心の傷」が癒えていくと、子どもは自分の気持ちを語りはじめ、気持ちが外に向いて動き出します。子どもは「育ち直し」の力が備わっています。育ち直しの名人ですと。そして続けて「学校は本来、点数の支配から解放され失敗が許される場所であればなりません。多様な子どもたちが失敗を重ねながら一緒に学びを作っていく場所です。その教育で中心となるのは、子どもたちの興味、関心、意欲と科学の成果に根ざした教師たちの実践です。・・・と書いています。学校は子どもと子どもがつながっていく所なのだと思います。点数で優劣を競う所ではなく、心を殺されない学校であってほしい。」(1)

同じ雑誌で、広木先生の次のページに西野博之さんのお話も載っていたので紹介します。そこで「多くの不登校支援の中で不登校の理解が大人目線の『学校に行かない困った子』という問題行動とし考えられています。大人が見ている不登校は必ずしも子どもの本当の気持ちをとらえられないのではないかと気がかりでした。もし、学校が安心で安全で楽しく学ぶ過ごせる場所であれば、学校に行きたいという子どもたちはたくさんいます。だけに行けないから困っている。この『困っている子』への理解を大人たちもできればいいなと思っています。」という文から不登校の子どものことを語っています。私も不登校の子は困った子どもではなく、困っている、どうしたらよいか分からず不安で一杯の「困っている子どもたち」だと思っています。

そして続けて「みんなと同じことができないダメな子」という親の見方をどうやって切り崩すかというのは、不登校の子どもを応援するときの一番大事なことです。」と。「子どもは人権のある一人の人間で、周りが学校に戻すとか、戻したことを成果と考えるような人たちに囲まれていたら、子どもは苦しみ続けられることになります。当り前のことができない自分はダメな子だと思っているうちは余計に動けないのです。子どもが十分に休んで、親もたとえあきらめや落胆からでも、心から『あなたのままでいいよ』と、受け止めることができたとき、学校へ行けないという問題は、子ども自身の問題になります。権利の主体を子どもに戻してあげる、主体が本人に移行していくと自然に子どもは、自分から選択して動けるようになる」と。「それでもやっぱり一日中ゲームをやっていたり、昼夜逆転して昼間に寝てばかりと親は心配です。でも、私が多くの不登校の子どもたちから教わったのは『あのときゲームがあったから生きてこられた』と、望みも喜びもなくなってしまい自分なんか生きてる価値もないと苦しんでいたけど、自分を追い詰めず助けてくれたのは目の前のゲームだったのです。ゲームを取り上げられていたら死んでいたと思うよという子どもたちが、ものすごく多いのです。」と書いています。そして「私は『食う・寝る・出す』が大事」とずっと言っています。親はこの3つに全力でアンテナを張ってほしいと思っています。これができたら、もう親の役割は終了と言っていいと思うのです。」と。そして「私は、この居場所を作るのに38年かけました。その子の一番得意なところに光を当てた環境作りをしてきました。『学びたいことを学びたいときに学びたいように学ばせたい。』と話しています。

不登校の子どもを『困った子ども』と見て、なんとかしなくてはと親が思ってアドバイスすればするほど、子どもは行き場がなくなり、学校へ行けない自分はダメな子と自分を責めることになります。西野さんが書いているように「ダメな困った子ども」ではなく、行けなくてどうしたらよいか困っている子ども」と捉えたら、親は子どもにいい教育を受けさせるとか、いい人生を送らせるとか、背負い過ぎるのではなく、子どもと一緒に成長していく「ゆるい親」がいいのですとも語る西野さんの言葉がバにしました。子どもは自分から歩み始めるまで待ってほしいのではと思っています。